

## 「マネー・ボール 奇跡のチームをつくった男」

マイケル・ルイス(著)

中山宥(訳)

ランダムハウス講談社 2004年3月17日刊

『ライアーズ・ポーカー』の作家マイケル・ルイスが今度は大リーグに関するドキュメンタリーを書いた。そこでは、大リーグで勝つためにはどういう選手を集めればよいのか、そのためにはどのような統計に注目すればよいのか、さらに究極的には資金力のないチームをどのように立て直せばヤンキーズのような金持ちチームに互していけるのかといった問題が扱われている。

本書の主演は、これらの問題に答えを与えたといわれているオークランド・アスレチックスのゼネラル・マネジャー(GM)のビリー・ビーンである。ビーンは高卒ルーキーとして大リーグで成功すること間違いなしとしてドラフト指名されながら、ほとんど活躍することなく8年後にはスカウトとして野球界の裏方に転じた人である。彼自身の経験からプロ野球のスカウトが目をつける有力選手が必ずしも成功しないこと、そして野球の常識とされてきたことにはそれほど根拠がないということを実感していた。ビーンはビル・ジェームズというアマチュア野球アナリストが独自に導き出した勝利の法則を参考にハーバード大卒の変わり種スカウト、ポール・デポスタが集めたデータを基に、選手を集めていく。その基準は、得点をあげるためには出塁率プラス長打率が重要であり、打率と盗塁は重要ではない、犠打や守備上のエラーはそれほど問題にはならないというものである。結果は2000年から4年連続のプレーオフ進出に結びついている。

ビーンの実績は見事であり、判官贔屓には痛快ではあるが、もう一つの現実も見失ってはならない。それはビーンの努力にもかかわらず、アスレチックスの経営は依然として赤字だということである。日本ではアスレチックスに最も近い経営をしていると思われるオリックスが近鉄と合併するという話が急浮上しているが、野球界の構造問題はGMの努力や有能なオーナーの才覚のみではいかんともしいほど根深いものであり、より長期的、大局的な観点から、この合併問題を扱うことが大切であると思われる。